

岐阜女子大学における今後の知識基盤社会に対応できる学生の育成 ～ポートフォリオ評価、学生の研究活動、卒業論文のデジタルアーカイブの利用～

富士 霸王・久世 均・櫛 彩見・横山 隆光・笠井 恵里・加治工 尚子

1. はじめに

岐阜女子大学では、今後の知識基盤社会で学生一人ひとりが生き抜くために必要とする知識・技能を、デジタルアーカイブを用いて大学1年次から卒業まで継続したカリキュラムで育成する計画を2017年に始めた。その基本的な活動は、学生一人ひとりの学びの状況、研究活動、その成果を記録することである。学生が自分で学びや研究を評価・改善することで、次に何を学ぶべきか自ら考えることができる等の主体的な行動力を身につけることが期待できる。また今後、知的基盤社会が整備されることによって、自身の研究や仕事等を主体的かつ的確に情報発信して他の人に伝えることが、生活や社会での基本的な行動として求められる。そのため、これらの知識・技能を大学4年間の学びの中で修得させて社会に送り出すことは、今後の大学教育における基本的な役割であり、責任でもあると考えられる。

そこで岐阜女子大学では、今後の知識基盤社会を考慮して、デジタルアーカイブを用いた3つの取り組みを実施した。1つ目は、ポートフォリオ評価によって自分の学びと今後何をすべきかを主体的に考えて実践する力をつけることである。2つ目は、学生の研究活動を記録・保管・利用できるように進め、研究のプロセスでの実践と他の研究資料を検討した研究の展開ができる力をつけることである。さらに3つ目には、研究成果をいかにまとめて他の人に伝えるか等の、今後の知識基盤社会に必要な表現力をつけることである。これらを年次計画で授業展開をする。

2. デジタルアーカイブの基礎

大学の教育や研究、社会・企業等の資料の収集や記録、選定評価項目の適用、保管（メタデータ）、流通、利用の方法について学び、大学、社会で利用できる確かな基礎力をつける。本学ではデジタルアーカイブの人材養成において、特色GP（特色のある大学教育支援プログラム）として文部科学省の支援による学習プログラムを開発しており、デジタル・アーキビスト認定養成機関である。その中の準デジタル・アーキビスト資格レベルの教育を行う。

3. ポートフォリオ評価への適用（自分の学びの評価）……資料の保管と利用

自分の学びにおける調査結果やノート、作業等の学修の記録について、各ステップで資料をファイル化する（スタディ・ログ）。そして必要に応じて過去の学修を見直すことで、学びの反省と次への学びを主体的に考え、実行できるようにする（図1）。この実践のプロセ

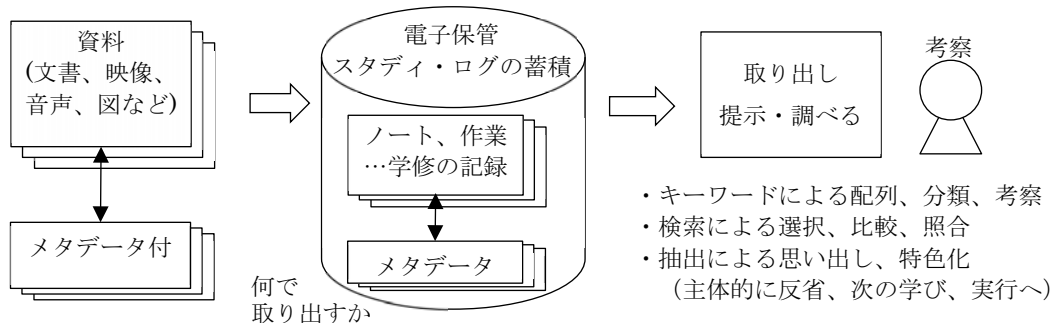


図1 スタディ・ログとポートフォリオ評価

スを通じて、メタデータの必要性を知り、キーワード（シソーラスの必要性）付けの確かな力をつける。例えば、保管した資料に対して同じの内容で抽出して並べ・分類・比較することで、何が達成でき、何に問題があり、今後何を学ばよいか考える。さらに、学びの照合や特徴づけなどの処理をして、学びの反省と次への課題を見つけ出し、主体的に意欲をもって学びを進める。

4. 研究活動の記録・保管・利用（研究活動ノート）……課題解決処理

文字、映像、音声等で構成する研究活動を記録する専用のノートに代わって、記録用のデジタルアーカイブを論文、研究資料を作るための基礎データとして利用する（図 2）。ただし、ノートの併用も考えられる。社会（企業・施設等）で何をどの様に記録すれば何ができるか考える力をつける。これによって、大学（論文・作品）や企業等でデータ記録の不備による問題の発生を防ぐことができると考える。特にプロジェクト研究では、1年、2年と長期で研究活動が行われるが、研究の実践と関連研究資料を保管し、より深い研究活動へ発展させることができる。また、研究のプロセスでの問題点を見出し、次の展開へより正確な記録ができるようにする。そして研究活動や資料管理の基本であるメタデータについて学修し、知識基盤社会で生き抜く力をつける。

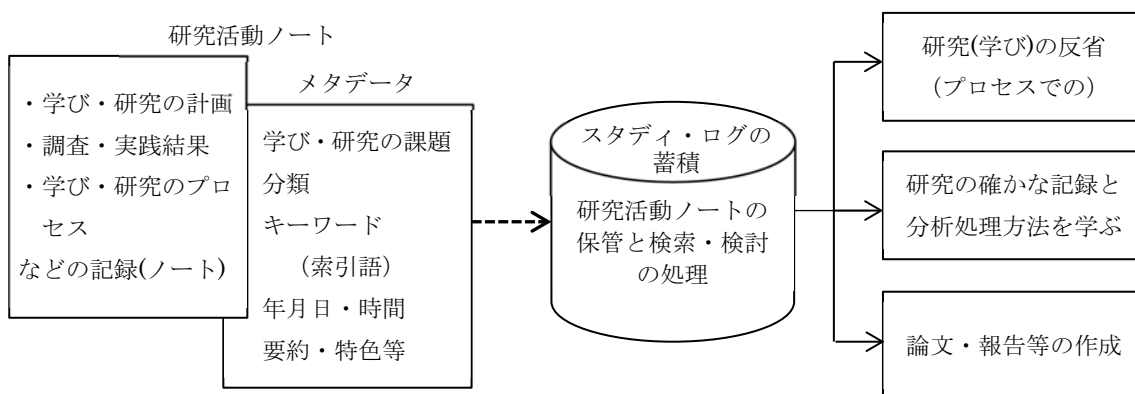


図 2 紙の記録（ノート）から電子記録の活用への発展

5. 卒業論文・研究のデジタルアーカイブ作成・保管（2～4章の成果として）

自分の作品、成果物、研究成果のデジタルアーカイブ化を行うが、その際にはメタデータやシソーラスのよりよい記入方法、研究報告、補完資料等の構成について学修する。これは企業等全ての分野で応用できる。このとき、自分の研究成果をいかに他の人に伝え、その特色を表現するかが重要である。今後の社会においては、自分の実践が正しく評価され、的確に伝えられるかが仕事上でも重要となる。なお、卒業論文のデジタルアーカイブ化は、平成29年度から実施している。

6. まとめ

以上の指導によって、学生の今後の知識基盤社会に対応する確かな力をつけ、社会に送り出す。このような紙と電子記録による情報活用の新しい習慣化には、学生や大学教育に取り入れるには感性として抵抗があり、慣れるまでには時間を要する。このため、授業や学生生活を通して、計画的な学修へ発展させる必要がある。なおこの教育実践は、岐阜女子大学 50 周年記念事業および私立大学研究ブランディング事業「地域資料デジタルアーカイブによる知の拠点形成のための基盤整備事業」の研究成果を学生の教育へ展開させることを目的としている。